西部第一落合遺跡群 (2)

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 1

前橋市教育委員会

西部第一落合遺跡群(2)

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 1

前橋市教育委員会



調査区全景 (南から)



調査区全景(北から)



西部第一落合地区全景(上が北、赤点が本遺跡)

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、 2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西部第一落合遺跡群(2)は古代上野国の中枢地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の確認はかないませんでしたが、7世紀から11世紀代の集落跡が見つかりました。こうした調査成果の積み上げが国府や国府のまちの姿の再現に繋がると考えております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和3年9月

前橋市教育委員会 教育長 吉川 真由美

例 言

- 1 本報告書は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う「西部第一落合遺跡群 (2)」の埋蔵文 化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業の体制は以下の通りである。

遺跡名 西部第一落合遺跡群 (2) (包蔵地名 前橋市 0134 遺跡)

遺跡コード 3 A 267

遺跡所在地 群馬県前橋市元総社町 749

監理指導 寺内勝彦(前橋市教育委員会)

発掘調査・整理作業担当 佐野良平(技研コンサル株式会社)

発掘調査期間 令和3年7月5日~令和3年7月28日

整理·報告書作成期間 令和3年8月1日~令和3年9月30日

発掘調査・整理作業参加者

畔見恒夫 新井 實 岡部四郎 桑原 清 木暮知二 杉田友香 高見壽美子 萩原正夫 星野一江 細野竹美 山口直子

- 3 本書の編集は佐野が行い、原稿執筆については I を寺内、他を佐野が担当した。
- 4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管されている。
- 5 下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。 山下工業株式会社

凡 例

- 1 挿図中に使用した北は座標北であり、座標については日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅳ系を使用した。
- 2 挿図に国土地理院発行1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、竪穴建物跡:H、井戸:I、土坑:D、ピット:Pである。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。 遺構 竪穴建物跡・・・1/30、1/60 井戸、畠跡、土坑、ピット・・・1/60 全体図・・・1/100 遺物 土器・・・1/3、1/4
- 5 本文および表中の計測値については()は現存値を、[]は復元値を表す。
- 6 遺構・遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構・・・硬化面: 火床面:

遺物・・・須恵器: 緑釉陶器:

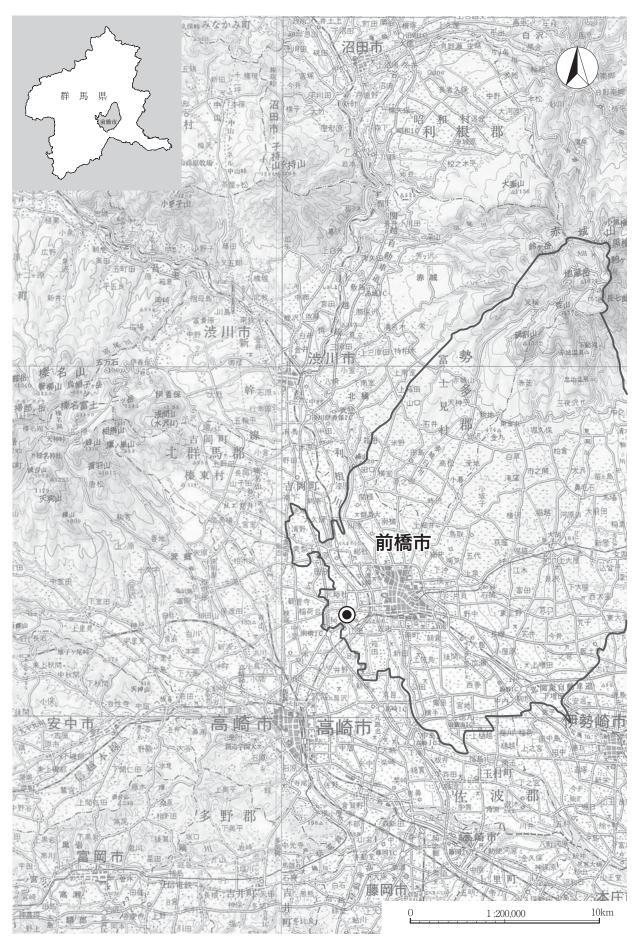
7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B (浅間 B 軽石:1108)

Hr-FA (榛名山二ッ岳渋川テフラ:6世紀初頭) As-C (浅間 C 軽石:3世紀後半~4世紀中葉)

目 次

巻頭図版	
はじめに	
例言・ト	
遺跡の	
	四世 査に至る経緯 ····································
	軍に主る程輝
]	
_	2 歴史的環境
	査方針と経過
	本土層
	構と遺物
	L 竪穴建物跡
_	2 井戸、畠跡、土坑、ピット
VI ŧ	とめ16
	挿図目次
Fig. 1	調査区位置図
Fig. 2	周辺遺跡図3
Fig. 3	グリッド設定図
Fig. 4	基本土層
Fig. 5	調査区全体図
Fig. 6	H-1・2・9号竪穴建物跡、畠跡11
Fig. 7	H-3~8号竪穴建物跡······12
Fig. 8	H-6号竪穴建物跡カマド、井戸、土坑
Fig. 9	出土遺物 (1)
Fig.10	出土遺物 (2)
Fig.11	西部第一落合遺跡群 (1)・(2) 周辺の景観想定図17
	表目次
Tab. 1	周辺遺跡一覧表
Tab. 2	西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表
Tab. 3	井戸・土坑・ピット計測表10
Tab. 4	出土遺物観察表
	写真図版
PL. 1	調査区全景、H-1全景、H-2全景、H-3全景、H-3火床面全景、H-4全景
PL. 2	H-3・5・7・8全景、H-6全景、H-6カマド全景、H-9全景、H-9カマド全景
	H-9石出土状況、I-1全景、I-2全景
PL.3	島跡全景、D-1全景、D-2全景、D-1・3・4全景、D-5全景、P-1・2全景
	P-3全景、P-4~6全景
PL. 4	P-7全景、P-8全景、P-9全景、調査区北側基本土層、調査区南側全景、
	調査区北側全景、調査風景
PL. 5	出土遺物



遺跡の位置

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長 山本 龍 (区画整理課) (以下「前橋市」という。)が施工する前橋都市計画事業 西部第一落合土地区画整理事業に伴い実施され、3年目にあたる。本事業地周辺は、上野国府推定域が近接する こと、北側では元総社蒼海土地区画整理事業施行に伴い、20年以上に亘り発掘調査が実施され、数多くの貴重 な調査成果を得ていることなどから、濃密な遺跡地として認識されている。

前橋市教育委員会(以下「市教委」という。)は、令和3年4月16日付けで前橋市より依頼を受け、同年5月19日に試掘・確認調査を実施した。調査の結果、古代遺物包含層などが検出されたため、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。

令和3年5月26日付けで前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼書が市教委に提出された。 市教委では既に他の発掘調査予定があるため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織 へ発掘調査業務を委託することで前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に 則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。令和3年6月25日付けで前橋市と民 間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三 者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

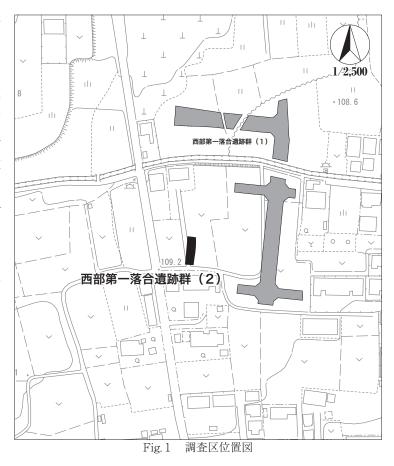
なお、遺跡名称「西部第一落合遺跡群 (2)」 (遺跡コード: 3 A267)の「西部第一落合」は土地区画整理 事業名を採用し、「(2)」は当該土地区画整理事業において2番目に実施した発掘調査として付したものであ る。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡が所在する前橋市元総社町は前橋 市街地中心から南西約4kmに位置する。 市街地西端にあたる場所で周辺には現在も 畑地が多く見られる場所である。遺跡南東 約200mには国道17号線高崎前橋バイパス、北側約200mには県道10号線前橋安 中富岡線、西側約1kmには関越自動車道 が南北に走っている。遺跡の東西には相 馬ヶ原扇状地を源とする牛池川と染谷川が 流れ、両河川の挟まれた地域に立地する。 落合地区は榛名山南東に広がる相馬ヶ原扇 状地から前橋台地といった平野部へと移行 する地帯である。

本遺跡は令和元年度に調査された西部第 一落合遺跡群(1)の西側隣接地にあた る。



2 歴史的環境

前橋市の南西部に立地する本遺跡周辺地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域である。関越自動車道建設や元総社蒼海土地区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構・遺物が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

- (1)縄文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東 [19] ・産業道路西 [20] 、染谷川左岸自然堤防上に上野国分僧寺・尼寺中間地域 [27] ・元総社小見Ⅲ遺跡 [13] ・元総社蒼海遺跡群 (24) [13] 、牛池川左岸自然堤防上に元総社蒼海遺跡群 (7) ・ (9・10) [13] などが挙げられ、各遺跡で竪穴住居跡が確認されている。
- (2) 弥生時代 当該期の遺跡は日高遺跡 [50] [51] ・上野国分僧寺尼寺中間地域・正観寺遺跡 [49] などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では As-C 下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。元総社寺田遺跡Ⅲ [44] では牛池川自然堤防上で後期の住居群が確認されている。
- (3) 古墳時代 利根川右岸の地域は県内でも有数の古墳密集地域であり、代表するものとして総社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳 [7]・愛宕山古墳 [8]・宝塔山古墳 [10]・蛇穴山古墳 [11] などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王廃寺 [4] が建立され、総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王廃寺は昭和3年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和49~56年にかけて7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」箆書の平瓦出土により山王廃寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成9~11年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成18・19年度調査では北・東・西面、平成20年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成21年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成22年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鴟尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術によるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。この時代の集落は牛池川・染谷川沿いの自然堤防上に展開しているが、前期~中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、総社閑泉明神北Ⅳ・V遺跡 [13]、元総社北川遺跡 [25]、元総社寺田遺跡Ⅲ、元総社明神遺跡 [43] などで水田跡が、西部第一落合遺跡群(1) [60] では畠跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺 [2]・国分尼寺 [3] の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は元総社地域の区域に約900m 四方に推定されている。関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡 [46] では県下最大級の掘立柱建物跡が、元総社蒼海遺跡群(99)・(127)・(136) [13]、上野国府等範囲内容確認調査28・33・34トレンチでは掘込地業を持つ建物跡が検出されている。元総社蒼海遺跡群(9)・(10)・(95) [13] では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。牛池川沿いの元総社明神遺跡णと元総社寺田遺跡町では人形が、元総社寺田遺跡では「國府」・「曹司」・「国」・「邑厨」などの国府関連施設名が書かれた墨書土器が出土している。元総社明神遺跡では南北方向の溝跡、閑泉樋遺跡 [36] や元総社蒼海遺跡群(7)・(9)・(10) [13] では東西方向の溝跡が確認され、国府域の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面硯や緑釉陶器、巡方(腰帯具)なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正 15 年に国指定史跡となり、昭和 40 年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。 昭和 55 年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・築垣・堀等が確認されている。また、平成 24 年

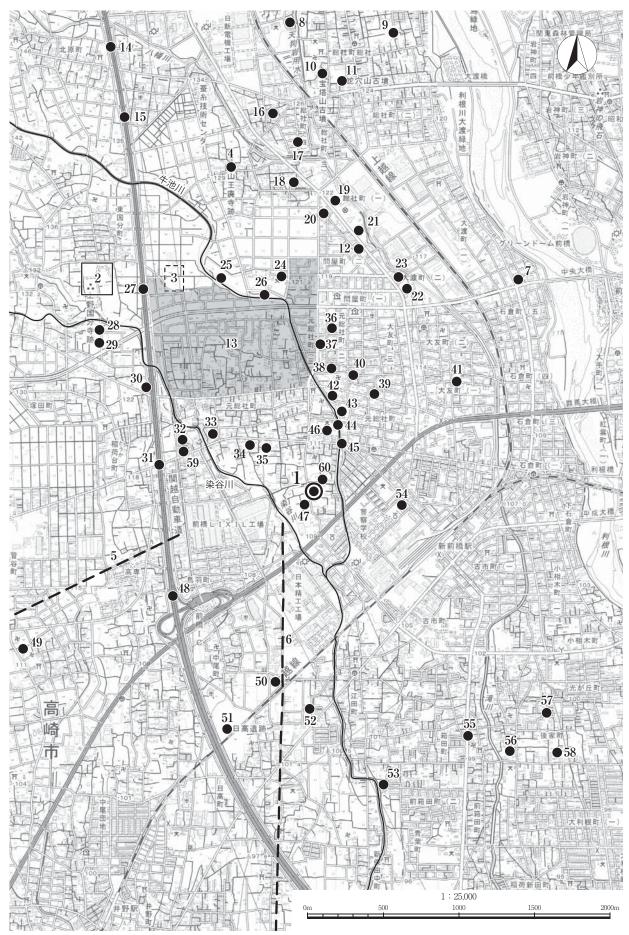


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

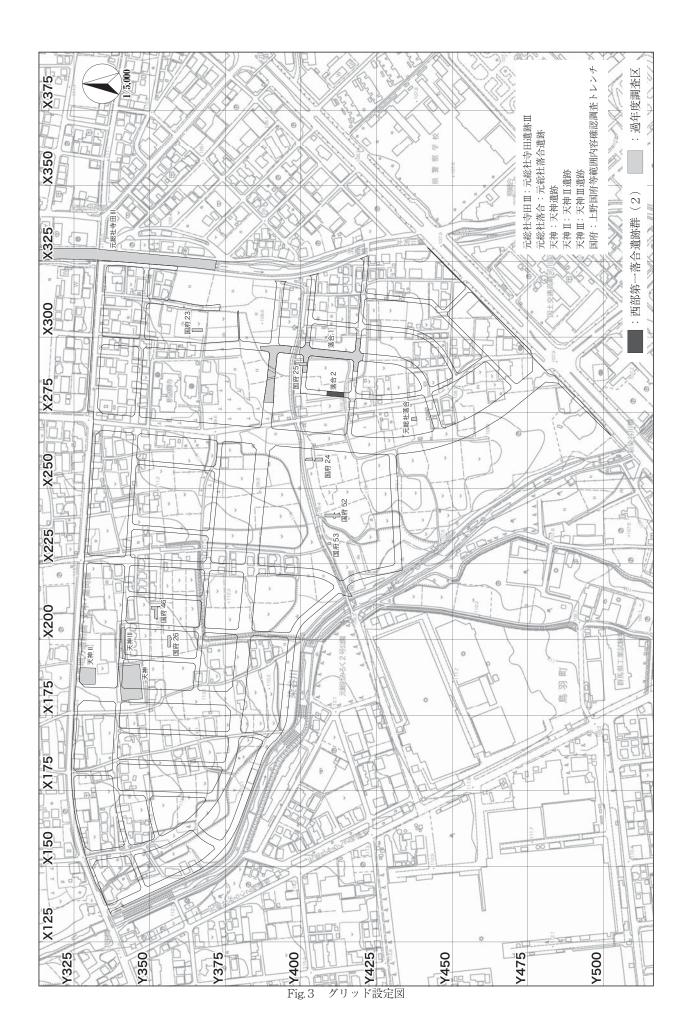
Tab	7 11 - 1 - 1 - 1				1
番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	西部第一落合遺跡群 (2)	17	大屋敷遺跡 I ~VI	39	堰越遺跡
2	上野国分寺跡	18	昌楽寺廻向遺跡・Ⅱ遺跡	40	堰越Ⅱ遺跡
3	上野国分尼寺跡	19	産業道路東遺跡	41	大友宅地添遺跡
4	山王廃寺跡	20	産業道路西遺跡	42	大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡
5	推定東山道国府ルート	21	稲荷塚道東遺跡	43	元総社明神遺跡 I ~ XIII
6	推定日高道	22	大渡道場遺跡	44	元総社寺田遺跡 Ⅰ~Ⅲ
7	王山古墳	23	大渡道場Ⅱ遺跡	45	寺田遺跡
8	愛宕山古墳	24	元総社中学校遺跡	46	元総社小学校校庭遺跡
9	遠見山古墳	25	元総社北川遺跡	47	元総社落合遺跡
10	宝塔山古墳	26	元総社牛池川遺跡	48	中尾遺跡
11	蛇穴山古墳	27	上野国分僧寺・尼寺中間地域	49	正観寺遺跡 I ~IV
12	稲荷山古墳	28	元総社西川遺跡	50	日高遺跡
13	元総社蒼海遺跡群	29	上野国分寺参道遺跡	51	日高遺跡
	元総社小見遺跡・II ~VI遺跡	30	塚田村東遺跡	52	勝呂遺跡
	元総社小見内遺跡・Ⅱ~Ⅹ遺跡	31	鳥羽遺跡	53	新保田中村前遺跡
	元総社草作遺跡·V遺跡	32	弥勒遺跡·Ⅱ遺跡	54	元総社稲葉遺跡
	総社甲稲荷塚大道西遺跡·Ⅱ~Ⅳ遺跡	33	元総社早道乙遺跡	55	箱田川西遺跡
	総社閑泉明神北遺跡 · Ⅱ ~ V 遺跡	34	天神遺跡・Ⅱ遺跡	56	村前遺跡
	元総社宅地遺跡	35	天神Ⅲ遺跡	57	五反田遺跡
14	北原遺跡	36	閑泉樋遺跡	58	五反田Ⅱ遺跡
15	国分境遺跡・Ⅱ・Ⅲ遺跡	37	閑泉樋南遺跡	59	元総社弥勒遺跡
16	村東遺跡	38	屋敷遺跡・Ⅱ遺跡	60	西部第一落合遺跡群(1)
				$\overline{}$	

度から平成28年度にかけて行われた第2期発掘調査成果から、これまで金堂と想定されていた建物跡が講堂であったことが判明し、それを受けて伽藍配置の変更が行われた。国分尼寺は昭和44・45年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査団により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の築垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成28年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成29年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡[31]で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。

本遺跡周辺では高崎市浜川町周辺から N -64° - E 方向へ東山道(国府ルート)が延びると推定されている。 前橋市域では平成 28 年度上野国府等範囲内容確認調査 45 a · b トレンチにおいて 2 時期の両側側溝を持つ道路跡を確認している。鳥羽遺跡でも 2 条の道路跡が確認されている。日高遺跡では幅約 4.5m の推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。西部第一落合遺跡群(1)では推定東山道の駅路と考えられていた低地部から上幅 $18\,\mathrm{m}$ 、深さ $1.8\sim2.4\,\mathrm{m}$ の大型の溝が確認された。溝底面の出土遺物や覆土中位に As-B が確認できることから古代の溝と想定されている。

当該期の一般的な集落は、牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。近年の調査では元総社蒼海遺跡群(75 街区)No. 2 [13] で鋳造遺構を伴う工房跡が検出され、小金銅仏・三鈷杵・銅印の鋳型と鋳造に使用した須恵器転用取瓶・坩堝が出土している。元総社蒼海遺跡群(145) [13] ではピットから 11 世紀前半と考えられるかわらけ状の坏と共に小金銅仏(観音菩薩立像)が出土している。元総社蒼海遺跡群(141) [13] では推定上野国府域を南北に縦断する道路状遺構の一部が検出されている。

(5)中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を 治めた。大規模な城郭としては県内最古級といわれている蒼海城は上野国府の地割りを利用して城が造られたと 云われているが、それを明確に示す文献・考古史料は見つかっていない。築城年代は定かではないが、『上毛伝 説雑記拾遺』「総社記」に「長元元年戊辰(1028)六月、上総介平忠常下総国より引移らる、其の嫡子下総介常



Tab. 2 西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表

遺跡名	調査年度	時代:主な遺構・遺物
天神遺跡	1986	奈良・平安:住居跡、井戸、土坑 ◇白磁・青磁・灰釉陶器
天神Ⅱ遺跡	1989	奈良・平安:住居跡、井戸、土坑 ◇土師器・須恵器・石器
元総社寺田遺跡Ⅲ	1996	縄文:土坑 弥生:住居跡 古墳:住居跡、水田、畠 奈良・平安:住居跡、井戸、土坑、溝、河道跡 中世:蒼海城外堀、井戸 近世・近代:土坑、井戸、畠 ◇船形木製品・墨書土器(国厨・国・厨他)・漆付着土器・顔料付着土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・硯(円面・風字・転用)・人形・形代(馬形・刀形・琴柱形)・斎串・横櫛・漆器・軟質陶器・青磁・石塔・人骨・獣骨
天神Ⅲ遺跡	2008	奈良・平安:住居跡、掘立柱建物跡、道路状遺構 中世以降:堀・溝 ◇八稜鏡・緑釉陶器・大型円面硯・須恵器香炉
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 23	2013	平安:住居跡、溝、土坑、ピット ◇黒色土器高台埦、灰釉陶器、軟質土器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 24		中世: 溝、土坑 近世以降: 溝(芦田堰の一部ヵ) ◇土師器・須恵器・軟質陶器・常滑焼・ 獣骨
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 25	1 2011.3	平安: 溝 中世: 土坑、ピット、落ち込み ◇墨書土器 (木・本)・刻書土器 (五芒星) ・ 灰釉陶器・獣骨
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 26	2013	平安:住居跡、溝 中世:道路状遺構 ◇暗文坏・灰釉陶器・漆付着土器・羽口
元総社落合遺跡	2014	奈良・平安:住居跡、土坑 〈縄文土器(堀之内式)・土師器・須恵器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 46	2016	古墳:住居跡(4世紀代) 奈良・平安:住居跡、溝、土坑、ピット 中世:溝、土坑、ピット群(掘立柱建物跡) ◇台付甕・灰釉陶器・緑釉陶器・古銭(隆平永宝ヵ)
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 52	2018	中世:溝、ピット 時期不明:道路状遺構 ◇灰釉陶器・黒色土器・青磁・茶臼
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 53	2018	近世:染谷川旧流路ヵ
西部第一落合遺跡群(1)	2020	古墳: 畠跡 平安: 竪穴建物跡、溝、井戸、土坑 中世: 蒼海城外堀 ◇瓦(刻書「大田」) 灰釉陶器・緑釉陶器・鉄製品・銅製品(刀柄頭ヵ)・陶磁器・石塔・石鏃
西部第一落合遺跡群(2)	2021	古墳:畠跡 飛鳥~平安:竪穴建物跡、土坑 中世:井戸、土坑、ピット ◇緑釉陶器・ 灰釉陶器

重、其の長子千葉介常胤、此の時城鎮護の為めに、五智の如来を城の四方に数箇寺を建立有って安置す」とあり、城(館か)としての存在が窺える。また『吾妻鏡』に「治承四庚子年(1180)九月晦日巳卯(中略)足利太郎俊綱、平家方人の為、同国府中の民居を焼き払う、是源家に属す輩の居住故也」とある。これは元総社地域を支配していた千葉常胤(源氏方)に対して足利俊綱(平氏方)が府中(国府周辺)を焼き払ったとの記載であり、国府あるいは国府周辺に千葉氏の居館が存在したことが証明できる史料である。こういった居館が初期蒼海城の姿であったと考えられる。

蒼海城は長尾・武田・上杉・織田・北条の支配を繰り返し、天正十八年(1590)の小田原落城により徳川家康の支配域となる。蒼海城には同年に諏訪頼忠、慶長六年(1601)には諏訪頼水(頼忠の子)に替わって秋元長朝が入部する。当時の城内は『上毛伝説雑記』に「戦後荒廃に帰し、普請成り兼ねたるにより城地艮(東北)に長屋を建てて居住した」と記されている。諏訪氏在城時は戦乱に明け暮れた城に対して一時凌ぎの修築に留めたと考えられる。秋元長朝は荒廃した城を大改築するよりも父景朝のゆかりの地である植野勝山(現在の総社町付近)に新城(総社城)を築くことを選んだようである。総社城築城までの間は蒼海城の東側に位置する八日市城に居住、慶長十五年(1610)に完成し入城、蒼海城は廃城となった。

近年、元総社蒼海遺跡群では蒼海城に関連する遺構が多く確認されている。二の丸と想定されている元総社蒼海遺跡群(21)・(23)では新旧2時期の堀跡が検出されている。その堀跡からは12~15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。元総社蒼海遺跡群(126)では本丸の土塁および堀跡が確認されている。西部第一落合遺跡群(1)では「蒼海城絵図」(元総社公民館複製展示)に描かれている南側の外堀と考えられる堀跡が検出されている。元総社蒼海遺跡群(145)でも蒼海城に関連する堀跡が確認されている。

調査方針と経過 Ш

委託調査箇所は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業地内であり、調査面積は115㎡である。グ リッド座標については近隣調査との整合性や以後の拡張性を考慮して元総社蒼海遺跡群の調査で使用されている 任意グリッド座標(国家座標(日本測地系第IX系) X = 44000.000、Y = - 72200.000 を基点とする4mピッチ のもの)を使用した。なお経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとお りである。

測点

日本測地系(第IX系)

世界測地系 (第区系 測地成果 2011)

X 281, Y 412 X = 42352.000 m, Y = -71076.000 m X = 42706.928 m, Y = -71367.778 m

発掘調査は遺構確認面まで重機(0.25 mバックホー)にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構 精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適 宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものは No 遺物とし、他の覆土中の 破片等については一括遺物として取り上げた。遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を 用いての測量・編集を行なった。記録写真は 35mm 判 モノクロ・リバーサルフィルムと、デジタルカメラの3 種類を用いて撮影を行った。調査区全景撮影についてはドローンを使用した。

調査経過については以下の通りである。7月5日より表土掘削開始。As-B 混土層下面でピット・土坑のプラ ンが検出されたため、この面を遺構確認面とした。但し、古代の遺構に関してはこの面では遺構プランが不明確 であるため、適宜トレンチを設定して掘削、竪穴建物跡の床面・壁の立ち上がりや遺構プランの確認を行った。 各遺構の調査は7月 20 日までに終了、21 日にドローンによる空中写真撮影を行った。同日、前橋市教育委員会 事務局文化財保護課の立会いのもと発掘作業終了確認が行われた。27・28 日に埋め戻し作業を行い現地での作 業を終了した。

基本土層 IV

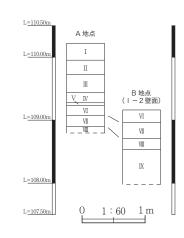
基本土層は調査区北西壁 (A 地点) と I - 2 の壁 面 (B 地点) において観察を行った (Fig. 4)。

I 層土は現代の表土層、Ⅱ 層土は暗褐色の As-B 混土層である。Ⅲ・Ⅳ層土は暗褐色土に焼土粒・炭 化物を主に含み、土器片も少量混入する包含層であ る。Ⅲ層上面において中世の遺構を確認している。 調査区北西側においては As-C を含む黒色土、いわ ゆる「C黒」と呼称される土層(V層)が確認でき る。また「C黒」上面には部分的に Hr-FA を含む 洪水堆積層が見られる。VI~VII層は非常に粘性の高 体崩落に起因する陣場岩屑なだれ(約1.7万年前) 以降に堆積した河川性堆積物(相馬ヶ原扇状地堆積 物上部)と考えられている。

(1) 早田 勉 2018 「付編 自然科学分析」

『小八木薬研寺遺跡』 高崎市教育委員会





基本土層

表十届

暗褐色土(10YR3/3) As-B 混土層。As-B を多量、焼土粒・炭化物を 微量含む。締まり有り、粘性やや弱い。

暗褐色土(10YR3/4) 白色軽石・焼土粒・炭化物を少量含む。

土器片含む。締まり有り、粘性有り 焼土粒・炭化物を微量含む。土器片含む。

暗褐色土 (10YR3/4)

締まり有り、粘性有り。 As-C を含む黒色土層。締まり有り、粘性有り。

黒褐色土 (10YR2/2)

暗褐色粘質土。締まり強い、粘性強い。

暗褐色土 (10YR3/4) VT

黒褐色土 (10YR2/2)

黒褐色粘質土。締まり強い、粘性強い。 褐灰色粘質土。締まり強い、粘性強い。

褐灰色土 (10YR5/1) 総社砂層。相馬ヶ原扇状堆積物(上部)

Fig. 4 基本土層

VIII

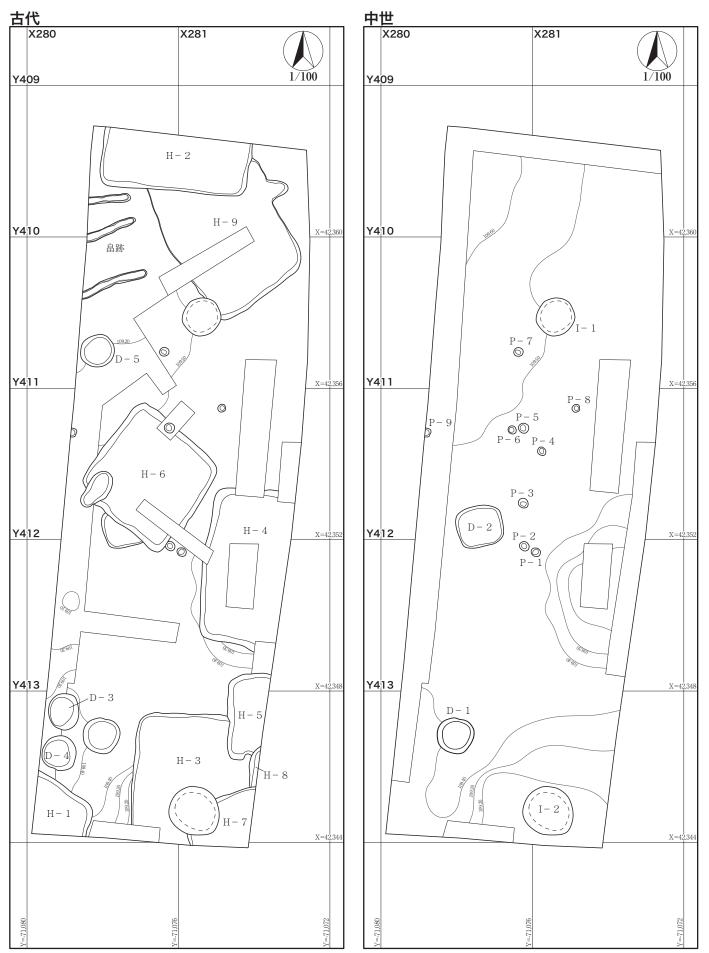


Fig. 5 調査区全体図

V 遺構と遺物

1 竪穴建物跡

H-1号竪穴建物跡 (Fig. 6 · 9、Tab. 3、PL. 1 · 3)

位置 X280、Y413 主軸方向 N-54°-W 規模 大部分が調査区外。東西(1.83) m、南北(1.52) m、壁 高 0.09 m。 床面積(1.90) m 床面 中央部に硬化面が広がる。 カマド 確認できず。床面や調査区壁の焼土分布状況から東壁側(調査区外)に設置されていると推測される。 出土遺物 所謂「かわらけ」と呼称される須恵器小皿(1)を図示。その他に土師器・須恵器の坏・甕や灰釉陶器埦の小片等が出土している。 時期出土遺物の傾向から 11 世紀後半と想定される。

H-2号竪穴建物跡 (Fig. 6 · 9 、Tab. 3 、PL. 1 · 3)

位置 $X280 \cdot 281$ 、Y409 主軸方向 N-6°- E 規模 半分以上は調査区外。東西 3.89 m、南北(1.44) m、壁高 0.51 m。 床面積(5.71)㎡ 床面 地山床 重複 H-9と重複関係にあり、本遺構はH-9より新しい。カマド 確認できず 出土遺物 須恵器盤(1)、土師器坏($2\sim4$)を図示。その他に土師器・須恵器の坏・甕の小片が出土している。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から8世紀後半と想定される。

H-3号竪穴建物跡 (Fig. 7 · 10、Tab. 3、PL. 1 · 3)

位置 $X280 \cdot 281$ 、Y413 主軸方向 $N-86^{\circ}-W$ 規模 東西 (3.10) m、南北 (3.45) m、壁高 0.30 m。 床面積 (6.78) m 床面 中央部から東壁方向にかけて硬化面が広がる。 重複 $H-5 \cdot 7 \cdot 8$ 、I-2と重複関係にあり、本遺構は最も古い。 カマド カマド本体の確認には至っていないが、東端の床面に火床が確認できることから東壁側にカマドがあったと推測される。カマド本体は H-8 により削平されている。 出土遺物 緑釉陶器稜皿 (1)、須恵器坏 (2) を図示。その他に土師器・須恵器の坏・甕・土釜や灰釉陶器境の小片が出土している。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から 9 世紀末から 10 世紀初頭と想定される。

H-4号竪穴建物跡 (Fig. 7 · 10、Tab. 3、PL. 1 · 3)

位置 X281、Y411・412 主軸方向 N - 5°-E 規模 東半分は調査区外。東西(2.21) m、南北 4.09 m、 壁高 0.30 m。 床面積(6.64) m 床面 地山床 カマド 確認できず 出土遺物 須恵器埦(1)と須恵器小皿(かわらけ、2・3)を図示。その他に土師器・須恵器の坏・甕、土釜や灰釉陶器埦の小片が出土している。 時期 出土遺物の傾向から 11 世紀と想定される。

H - 5 号竪穴建物跡 (Fig. 7、PL. 1)

位置 X281、 $Y412\cdot 413$ 主軸方向 N-1°-E 規模 半分は調査区外。東西 (1.00) m、南北 (2.36) m、壁高 0.36 m。 床面積 (2.11) m 床面 地山床 重複 $H-3\cdot 8$ と重複関係にあり、本遺構は最も新しい。カマド 確認できず 出土遺物 土師器・須恵器の坏・甕・羽釜や灰釉陶器境・瓶類の小片が出土している。時期 重複関係と出土遺物の傾向から 10 世紀後半頃と想定される。

H - 6 号竪穴建物跡 (Fig. $7 \cdot 8 \cdot 10$ 、Tab. $3 \cdot PL. 1 \sim 3$)

位置 X280・281、Y411・412 主軸方向 N - 38°-E 規模 東西 2.94 m、南北 2.91 m、壁高 0.36 m。 床面積 7.82 m 床面 地山床 カマド 南西隅に位置。燃焼部は平面形状楕円形に窪む。 出土遺物 須恵器埦(1)と羽釜(2)を図示。その他に土師器・須恵器の坏・甕や灰釉・緑釉陶器埦の小片が出土している。 時期 出土遺物の傾向から 10 世紀後半と想定される。

H - 7号竪穴建物跡 (Fig. 7 · 8 、 PL. 1)

位置 X281、Y413・414 主軸方向 N-21°-W 規模 大部分が調査区外。東西(1.97) m、南北(1.50) m、 壁高 0.38 m。 床面積(1.56) m 床面 地山床。中央部に向かってやや傾斜する。 重複 H-3・8、I-2と重複関係にあり、本遺構はI-2より古く、H-3・8より新しい。 カマド 確認できず 出土遺物 土 師器・須恵器の坏・甕や灰釉陶器瓶類・緑釉陶器埦の小片が出土している。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から 10 世紀後半頃と想定される。 備考 床面において方形状の総社砂層切石が確認されている。

H - 8 号竪穴建物跡 (Fig. 7、PL. 1)

位置 X281、Y412·413 主軸方向 N-7°-E 規模 一部のみ確認。東西 (0.25) m、南北 (1.11) m、壁高 0.31 m。 床面積 (0.20) m 床面 地山床 重複 H-3・5・8と重複関係にあり、本遺構はH-5・7より古く、H-3より新しい。 カマド 確認できず 出土遺物 土師器・須恵器の坏・甕や灰釉陶器埦の小片が出土している。 時期 重複関係や出土遺物の傾向から 10 世紀前半頃と想定される。

H−9号竪穴建物跡 (Fig. 6 · 10、Tab. 3、PL. 2 · 3)

位置 X280・281、Y409・410 主軸方向 N - 59°-E 規模 東西 3.19 m、南北 (3.96) m、壁高 0.27 m。 床面積 (8.49) ㎡ 床面 地山床 重複 H - 2、I - 1と重複関係にあり、本遺構は最も古い。 カマド 北東方向に位置し、周囲に焼土粒・炭化物が散っている。燃焼室は壁外へ 0.52 m突出する。燃焼部幅 0.50 m。燃焼部底面から煙道部へ向かって緩やかに上がる。 出土遺物 須恵器坏 (1) と土師器坏 (1) を図示。その他に土師器・須恵器の坏・甕の小片が出土している。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から 7世紀後半から 8世紀初頭と想定される。 備考 建物西側床面において角柱状の総社砂層切石 2 つ、扁平な川原石 1 つが確認されている。

2 井戸、畠跡、土坑、ピット (Fig. 5・6・8・10、Tab. 2・3、PL. 1~3)

計測値については「Tab. 2 井戸、土坑、ピット計測表」を参照のこと。井戸2基・ピット9基と土坑2基(D $-1\cdot 2$)については覆土中に As-B 混入土が確認できることから中世に帰属する遺構と想定される。その他の土坑(D $-3\sim 5$)に関しては土層や出土遺物から古代の遺構と考えられる。 畠跡は「C 黒」(V 層)が面として確認できる調査区北西側のみで検出。 3条の畝間溝の覆土中にはブロック状の Hr-FA 洪水層土が確認できる。 6世紀前半頃の畠跡と想定される。

 Tab. 3
 井戸・土坑・ピット計測表

 井戸

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	確認深度 (m)	平面形状	出土遺物	備考
I - 1	X281、Y410	1.00	0.98	0.99	円形	土師器、須恵器	断面箱状
I - 2	X280 · 281、Y413	1.34	1.28	1.00	円形	土師器、須恵器	断面漏斗状

土坑							
遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ (m)	平面形状	出土遺物	備考
D - 1	X280、Y413	0.96	0.91	0.23	円形	土師器、須恵器	断面弧状
D - 2	X280、Y411·412	1.21	1.08	0.17	方形	土師器、須恵器、灰釉陶器	断面弧状
D - 3	X280、Y413	0.96	0.81	0.25	楕円形	土師器、須恵器	断面弧状
D - 4	X280、Y413	0.92	0.92	0.29	円形	土師器、須恵器、灰釉陶器	断面弧状
D - 5	X280、Y410	0.88	0.90	0.12	円形	土師器、須恵器	断面弧状

ピット							
遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	出土遺物	備考
P - 1	X280 · 281、Y412	0.24	0.22	0.14	円形		断面U字状
P - 2	X280、Y412	0.26	0.25	0.18	円形	土師器	断面U字状
P - 3	X280、Y411	0.26	0.26	0.30	円形		断面U字状
P - 4	X281., Y411	0.23	0.22	0.14	円形		断面U字状
P - 5	X280、Y411	0.27	0.26	0.35	円形	土師器、須恵器	断面U字状
P - 6	X280、Y411	0.22	0.21	0.14	円形		断面U字状
P - 7	X280、Y410	0.25	0.23	0.22	円形	土師器	断面U字状
P - 8	X281、Y411	0.21	0.20	0.15	円形		断面U字状
P - 9	X280、Y411	0.23	(0.16)	0.22	円形		断面U字状

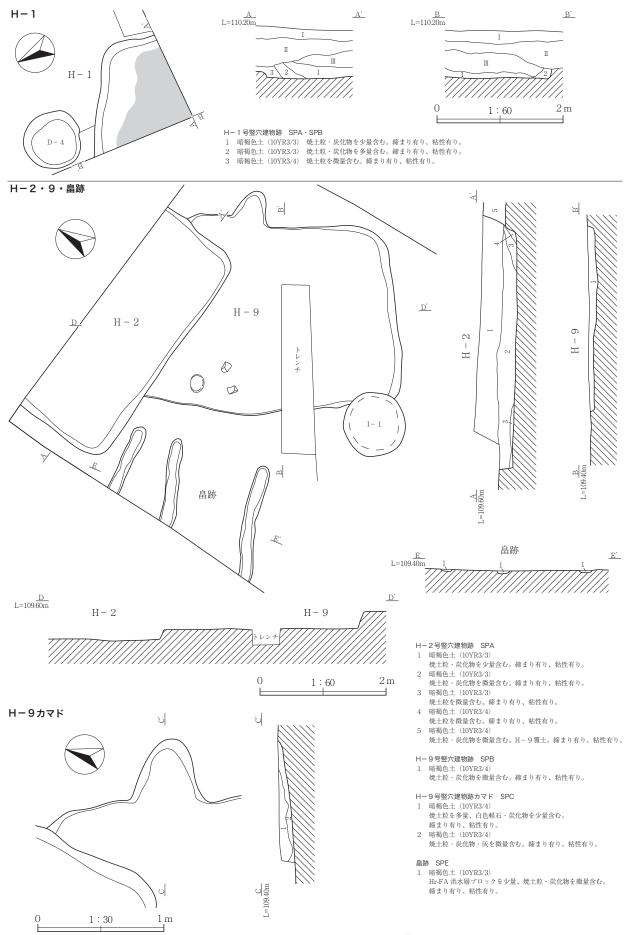
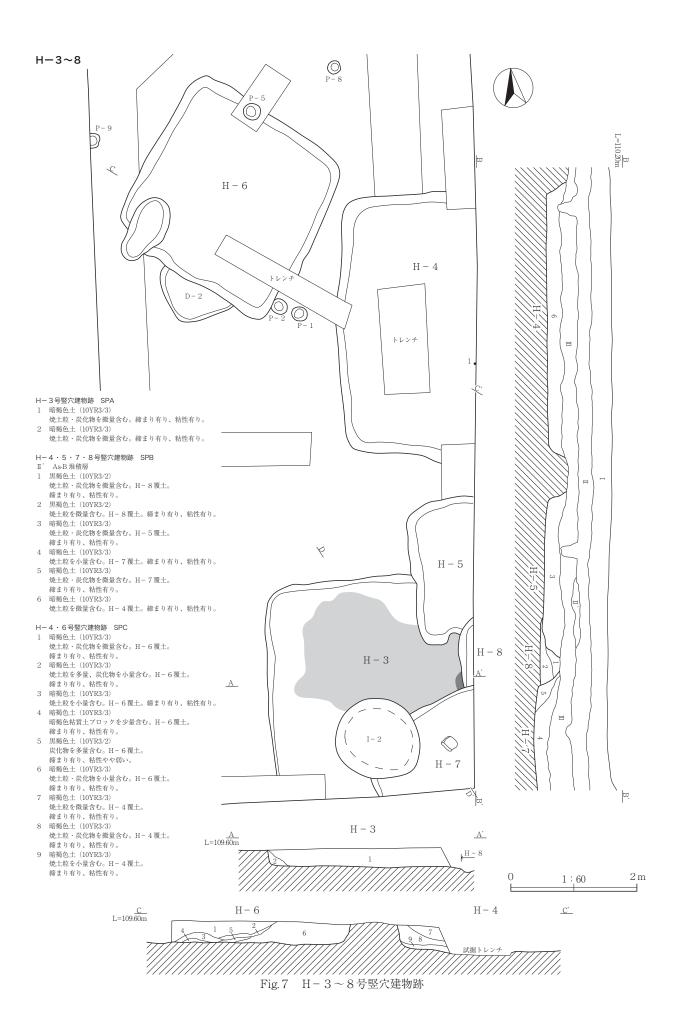
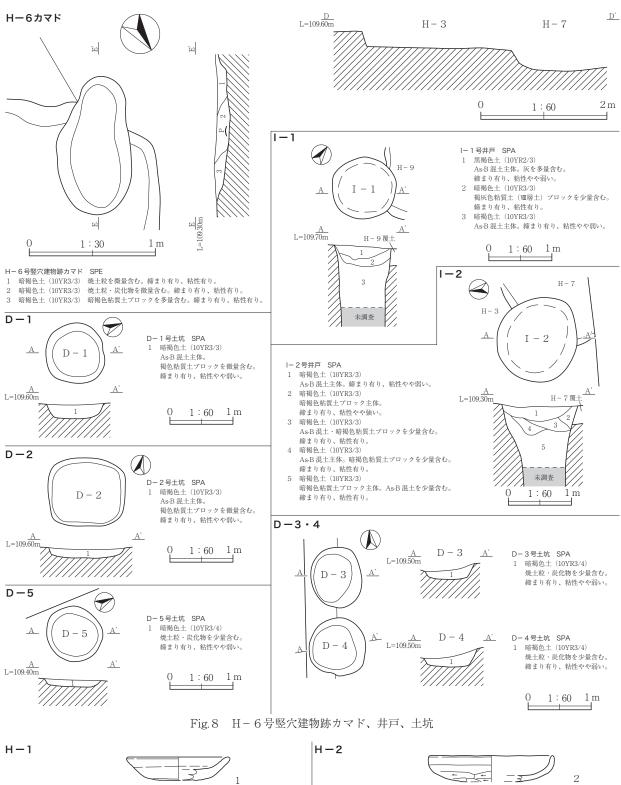
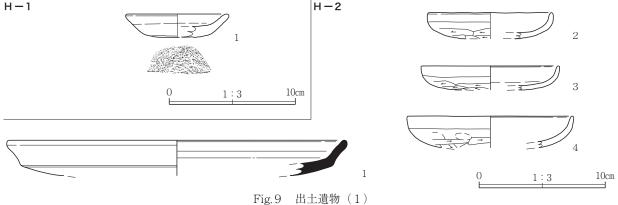
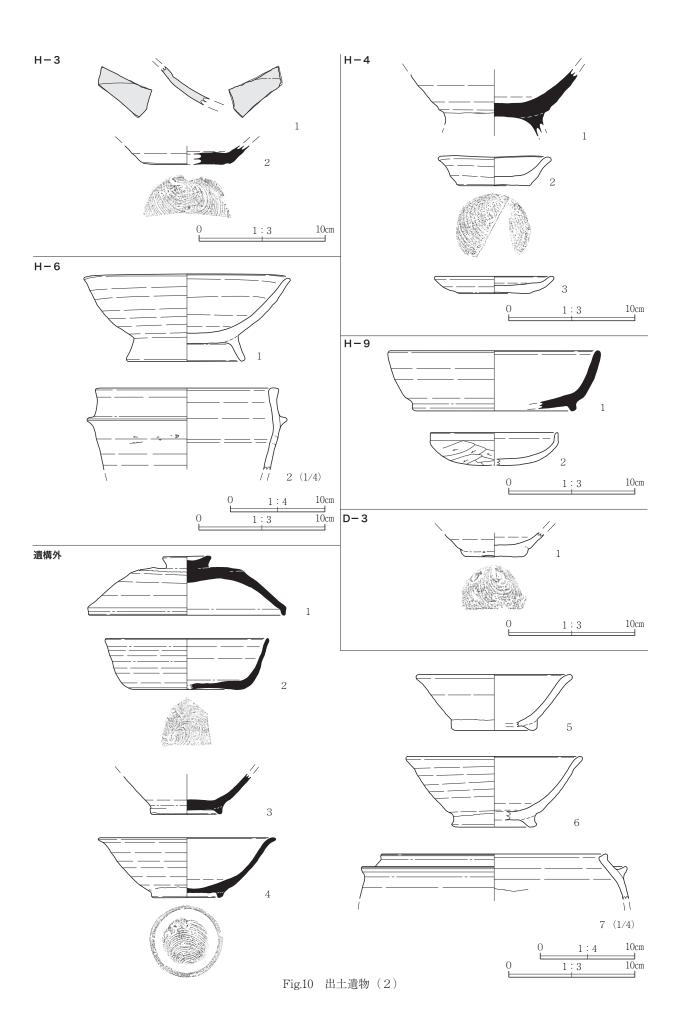


Fig. 6 H-1·2·9号竪穴建物跡、畠跡









Tab. 4 出土遺物観察表

H - 1

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 小皿	(8.2)	(5.4)	18.5	白・黒・茶色 粒	酸化焰		外面ロクロナデ、底面回転糸切り。 内面ロクロナデ。	1/2 残存。かわらけ。

H - 2

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 盤	(27.0)	-	(3.0)	白・黒色粒	堅緻		外面ロクロナデ→体部回転ヘラケズリ。 内面ロクロナデ。	破片。口縁~体部。
2	覆土	土師器 坏	(10.0)	丸底	(2.0)	白·黒色粒、 黒雲母	良好	橙	外面口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ。 内面横ナデ	破片。
3	覆土	土師器 坏	(11.0)	丸底	(1.9)	白・黒色粒、 黒雲母	良好		外面口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部横ナデ、以下ユビナデ。	破片。
4	覆土	土師器 坏	(13.2)	丸底	(2.5)	白・黒色粒、 黒雲母	良好		外面口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ。 内面横ナデ	破片。

H - 3

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況·備考
1	覆土	緑釉陶器 稜Ⅲ	-	-	(3.0)	粘土質	堅緻	オリーブ 灰	外面ロクロナデ、緑釉施釉。明確な稜線を有する。 内面ロクロナデ、緑釉施釉。明確な段を有する。	破片。 体部中位。
2	覆土	須恵器 坏	-	(6.9)	(1.5)	白・黒色粒	堅緻		外面ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	破片。 体部下部~底部。

H – 4

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	床面	須恵器 埦	-	-	(5.2)	白・黒色粒粗 粒	堅緻		外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面ロクロナデ。	1/3 残存。 体部下部~底部。
2	覆土	須恵器 小皿	(9.0)	(5.8)		白·黒·茶色 粒	酸化焰		外面ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	2/3 残存。かわらけ。
3	覆土	須恵器 小皿	[9.0]	(5.9)	1.3	白·黒·茶色 粒	酸化焰		外面ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	破片。かわらけ。

H - 6

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 埦	16.5	9.5		白·黒·茶色 粒	酸化焰		外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面ロクロナデ。	4/5 残存。
2	覆土	羽釜	(19.7)	-	8.7	白·黒色粒、 雲母	酸化焰		外面ロクロナデ。5 mm程の鍔を作出。 内面ロクロナデ。	破片。口縁~体部。

H - 9

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	床面	須恵器 坏	(16.8)	(13.0)	4.4	白・黒色粒	堅緻		外面ロクロナデ。高台貼付け後、底部へラ調整。 内面ロクロナデ。	1/4 残存。
2	覆土	土師器 坏	(10.0)	丸底	2.6	白·黒色粒、 黒雲母	良好		外面口縁部横ナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部横ナデ、以下ユビナデ。	破片。

D-3

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 小皿	-	(4.9)		白·黒·茶色 粒	酸化焰		外面ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	1/3 残存。かわらけカ。

遺構外

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	包含層	須恵器 蓋	(16.0)	-	4.6	白・黒色鉱物	堅緻	堅緻	外面ロクロナデ。摘み貼付け後、周囲をヘラ調整。 内面ロクロナデ。	2/3 残存。
2	包含層	須恵器 坏	(12.7)	(7.0)	4.3	白・黒色粒	堅緻	灰白	外面ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	1/5 残存。
3	包含層	須恵器 埦	(14.1)	5.7	4.8	白・黒色粒	堅緻	褐灰	外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面ロクロナデ。	1/4 残存。
4	包含層	須恵器 埦	-	5.5	(3.2)	白色粒	堅緻	黒褐	外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面ロクロナデ。	1/4 残存。
5	包含層	須恵器 埦	(12.4)	(7.2)	4.9	白・黒色粒	酸化焰	にぶい褐	外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面ロクロナデ。	1/5 残存。
6	包含層	須恵器 埦	(14.0)	(7.4)	5.5	黒・茶色粗粒	酸化焰	にぶい褐	外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、高台貼付け。 内面ロクロナデ。	1/4 残存。
7	包含層	羽釜	(24.0)	-	(5.0)	白・黒色粒	酸化焔	褐灰	外面ロクロナデ。9 mm程の鍔を作出。 内面ロクロナデ。	破片。

VI まとめ

今回の調査で竪穴建物跡9軒、井戸2基、土坑5基、ピット9基、畠跡1面を検出した。ここでは西部第一落合遺跡群(2)(以下「落合2」)と本遺跡に隣接する西部第一落合遺跡群(1)(同「落合1」)の調査成果を基に、既往の調査事例と合わせて本地域の土地利用の変遷について概観し、考察を加えたいと思う。

中村岳彦氏は元総社蒼海遺跡群の調査成果を基に推定上野国府周辺の古代景観について検討を行っている (中村 2018)。発掘調査で確認された古墳時代後期の竪穴建物跡の分布を地図に落とし込むと牛池川両岸の 微高地および染谷川左岸の自然堤防上に集落が集中し、周辺の後背低地や台地上には水田や畠などの生産域 を備えていたと指摘している。

楽谷川・牛池川に挟まれた落合地区では発掘調査の事例が少ないことも影響して古墳時代の集落跡は極めて少ない。検出事例として2遺跡あり、本遺跡から北西方向に位置する上野国府等範囲内容確認調査46トレンチにおいて4世紀代の竪穴建物跡が1軒、本遺跡から北東方向の牛池川河川改修工事に伴って調査が行われた元総社寺田遺跡皿で4世紀代3軒、As-Cに直接埋没した水田・畠が確認されている。落合1・2でも集落は確認されておらず、出土遺物を見ても該期の遺物は少ない。集落の痕跡は確認されてはいないが、落合1調査区北側や落合2調査区北西隅部などの「C黒」層が確認できる場所では畠跡が検出されている。覆土中に Hr-FA 洪水層を含んでいるため古墳時代後期の畠跡と想定される。また落合1・2調査区南側や本遺跡南西100mに位置する元総社落合遺跡では「C黒」層は確認されていない。削平の影響と考えられるが「C黒」層がある場所と同様に畠跡が広がっていた可能性が高い。以上のことから古墳時代後期には落合1・2周辺は生産域として使用されていたと考えられ、集落は元総社地域から続く牛池川左岸や染谷革右岸沿いの自然堤防上に分布するのではないかと推測される。

古墳時代以降、それまで生産域として利用されていた落合地区でも集落が営まれるようになる。落合2では7世紀から11世紀の竪穴建物跡が9軒、落合1では9世紀から11世紀にかけての竪穴建物跡が36軒、元総社落合遺跡では8世紀代6軒、9世紀代3軒の竪穴建物跡が確認されている。3遺跡の成果をまとめると8世紀頃までの集落は少なく散在しているが、9世紀以降は徐々に増加し地域内に広く展開していく。この様相は11世紀頃まで続くと考えられる。

落合 $1 \, \mathrm{W} - 1$ は古代から存在していた大形の溝である。底面出土の遺物や覆土中位に As -B が確認できることから 10 世紀頃までは底面近くまで流水していたと推測される。落合 1 ではこの溝から分岐する溝($8 \sim 9$ 世紀代)が 3 条確認されている。落合 $1 \, \mathrm{W} - 1$ から取水し、その溝を伝って周辺集落や畠等の耕作地へ給水していたと考えられる。溝から集落域北端まで約 $30 \, \mathrm{m}$ の距離がある。この間には東山道国府ルートが通ると推定されているが、その痕跡は未だ確認されていない。

中世の集落域を把握することは難しいが、落合1・2では井戸・土坑・ピット、上野国府等範囲内容確認調査46トレンチでは掘立柱建物跡と想定されるピット群が確認されており、集落の存在を垣間見えることができる。室町時代中期の禅僧万里集九の詩文集『梅花無尽蔵』の長享二年(1488)九月二十九日の条をみると「僧万里、馬上より上野総社を望拝してみると、数年前の戦乱で数株の老樹に斧の傷跡を残すが、村落は平和に回復している様子が窺える。」と記されている。戦乱の渦中にあった元総社地域周辺にも村落が営まれていたことがわかる。

往時の蒼海城の姿を描かれた「蒼海城絵図」(複製前橋市総社資料館蔵)によれば落合1・2周辺は城外に位置し、落合1W-1は蒼海城南側の外堀にあたる。なお本遺跡北約200mに位置する釈迦尊寺は寺伝によれば、持統天皇元年(687)創建とされる歴史のある寺である。永禄六年(1563)甲州勢の兵火により寺は

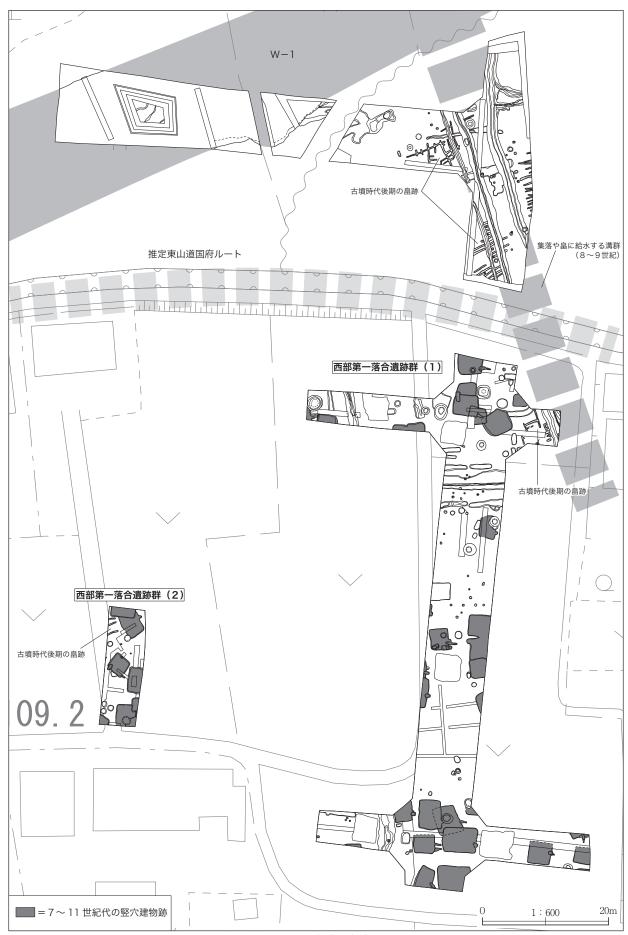


Fig.11 西部第一落合遺跡群 (1)・(2) 周辺の景観想定図

焼かれ、末寺であった竜松寺(現在の釈迦尊寺の場所)に移ったという。「蒼海城絵図」や総社神社に設置されている「蒼海城跡地図」を見ると現在の釈迦尊寺の位置に「龍松寺」と記載されており、そこから南東 方向へ牛池川を越えた場所に移転前の釈迦尊寺が確認できる。

以上の考察を基に本遺跡周辺の景観想定図を作成してみた(Fig。11)。古墳時代においては畠等の生産域として使用され、集落は少し離れた牛池川・染谷川沿いの自然堤防上に営まれたと考えられる。7世紀以降、落合1・2の集落は北を大溝(W - 1)と推定東山道駅路に、東西を牛池川と染谷川によって規制され、この台地上に集落域を広げていった考えられる。中世段階においては遺構も少なく判然としないが、少なくとも集落が存在していた可能性は高い。

本遺跡周辺の景観想定をしてみたものの調査成果の蓄積が少ないため未だ不明確な点が多い。同じ都市計画事業に伴う発掘調査である元総社蒼海遺跡群は調査開始から約20年以上が経過している。その間に蓄積した膨大な調査成果から推定国府周辺の様相や蒼海城の縄張りが少しづつ解明されてきている。落合地区での発掘調査はまだスタートしたばかりである。今後、西部第一落合遺跡群の調査成果の増加によって落合地区の土地利用の様相が解明されることを期待したい。

註

(1) ここでは便宜上、西部部第一落合土地区画整理事業地内を落合地区と呼称する。

引用・参考文献

論文等

中村岳彦 2018 「"推定上野国府"周辺の古代景観 - 元総社蒼海遺跡群の溝と道-」『群馬文化』第 332 号 群馬県地域文化研究協議会

市町村史

国府村誌編纂委員会 1968 『国府村誌』

報告書

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『鳥羽遺跡 I・J・K 区』

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『元総社寺田遺跡Ⅲ』

前橋市教育委員会 1987 『天神遺跡』 前橋市教育委員会 1989 『天神Ⅱ遺跡』

前橋市教育委員会 2008 『天神Ⅲ遺跡』

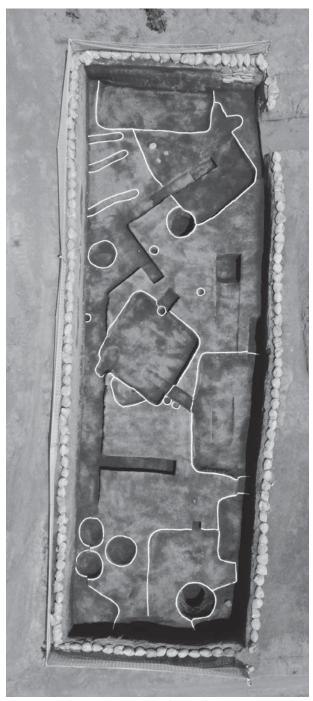
前橋市教育委員会 2010 『元総社蒼海遺跡群 (31) 』

前橋市教育委員会 2014 『元総社落合遺跡』

前橋市教育委員会 2015 『推定上野国府~平成 25 年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅲ 前橋市教育委員会 2018 『推定上野国府~平成 28 年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅵ 前橋市教育委員会 2019 『推定上野国府~平成 29 年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅶ

前橋市教育委員会 2020 『西部第一落合遺跡群 (1)』

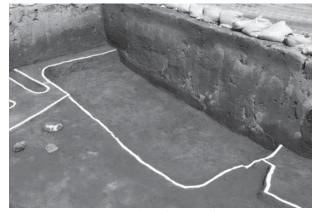
写真図版



調査区全景(上が北)



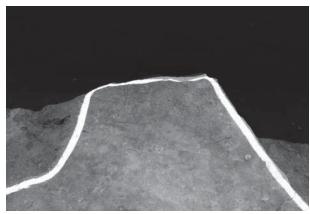
H-1全景(北東から)



H-2全景 (南東から)



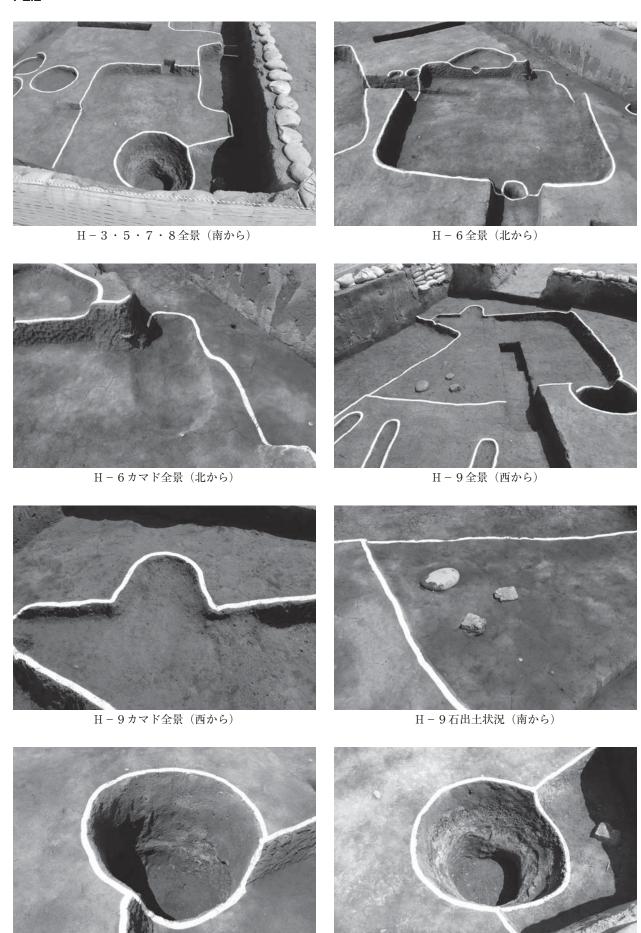
H-3全景 (西から)



H-3火床面全景(西から)

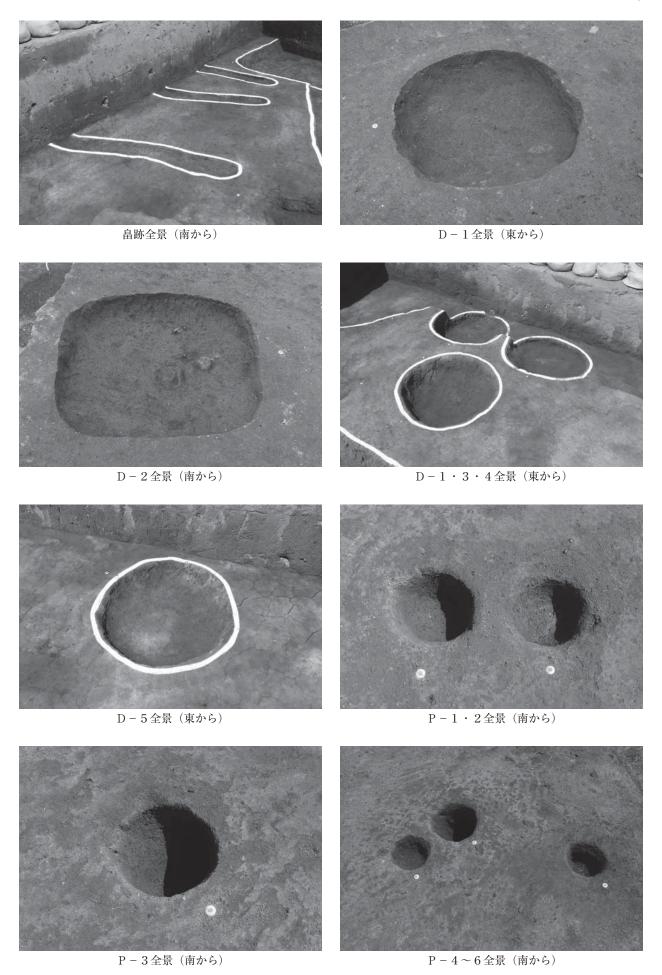


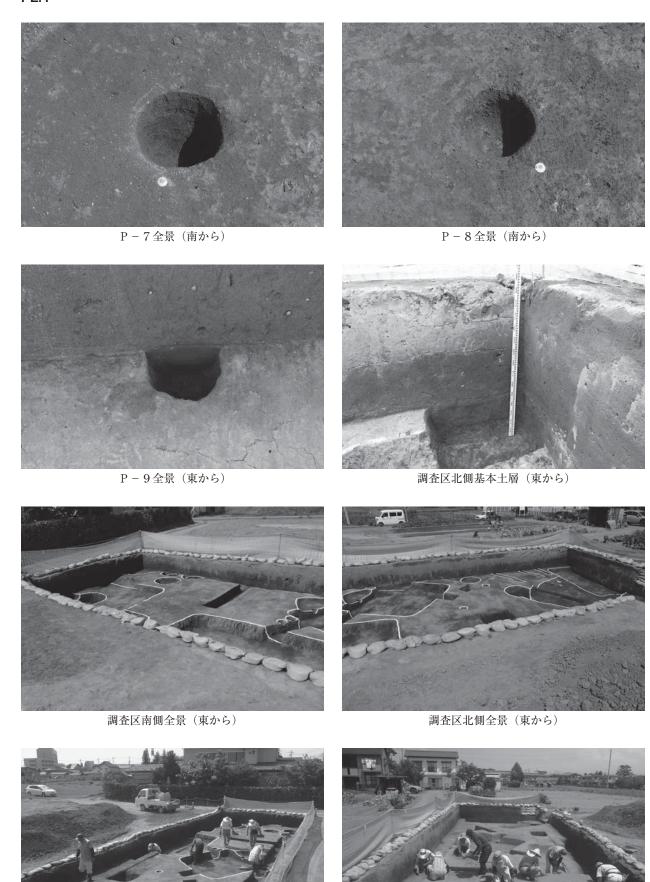
H-4全景 (西から)



I − 1 全景 (東から)

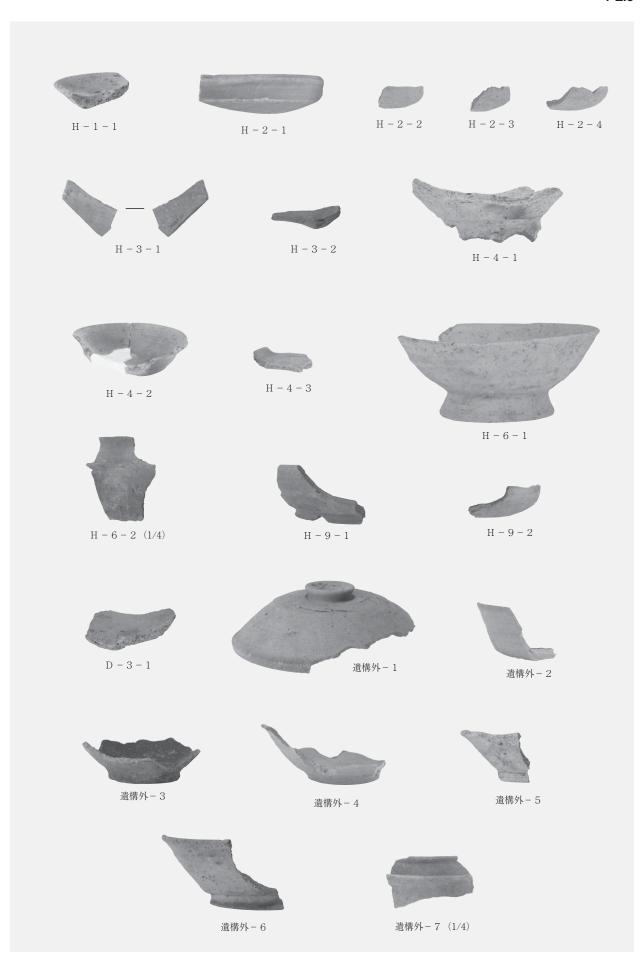
I-2全景(南から)





調査風景(北西から)

調査風景(南から)



報告書抄録

ふりかな	せいぶだいいちおちあいいせきぐん (2)
書名	西部第一落合遺跡群 (2)
副 書 名	前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発 行 機 関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番4
発 行 年 月 日	2021年 9 月30日

ふりがな	ふりがな		- F,	位	置	調査期間	調査	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東 経	M-STEX STES	面積	his Trist
せいぶだいいちおちあいいせきでん 西部第一落合遺跡群(2)	らんまけんまえばししらとううじゃまち 群馬県前橋市元総社町 749	102016	3 A267	36°22' 56	139°02' 16	20210705 \ 20210728	115㎡	前橋都市計画事業 西部第一落合 土地区画整理事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特 記 事 項
	生産	古墳時代	島跡	1面		・畝間溝の覆土中にHr-FA洪水層土ブロックが含まれる。
西部第一落合遺跡群 (2)	集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 土坑	9軒 3基	土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器	・7世紀後半〜11世紀後半の集落跡
	朱冶	中世	井戸 土坑 ピット	2基 2基 9基		

西部第一落合遺跡群(2)
前橋都市計画事業西部第一落台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年9月15日 印刷 2021年9月30日 発行

前橋市教育委員会事務局文化財保護課 発行

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番4

TEL 027-280-6511 技研コンサル株式会社 編集 印刷 朝日印刷工業株式会社